

北京オリンピック開幕式(閉幕式)印象記

丸川哲史

自分が勤めている大学の在学研究期間を利用して中国・北京に滞在していたのだが、ぜひ北京オリンピックについて的印象を書いてほしいという、ある先輩研究者の要請でこの文章を書いている。実際には、北京オリンピックの期間には、訪問先の研究機関の友人たちと北京から脱出し、地方の一般家庭にやつかいになり、開幕式の様子などをテレビで眺めたりしていただけだったのだが。北京市内、特に会場付近では、大規模な交通規制や移動の制限があつたためか、オリンピックの喧噪を逃れるために北京を離れた市民も多かったと聞く。にもかかわらず、実のところ私自身は、北京オリンピックにまつわる様々な現象には、興

味津々の態で身構えていた。世界中で展開された聖火ランナーレーが中国国内の少数民族にかかわる問題を(その内容や質の如何はともかくとして)露呈することになったことにも鑑みられるとおり、もとよりオリンピックは一つの象徴政治の場として読み解かれることは避けられないもの、と思われる。私は、さまざまなタイプ、階層、民族の方々に接触する機会もないことではないので、そこから得られた知見を整理することも無駄ではあるまい、と考えた次第である。

中国人学者の中では、オリンピックに全く無関心な方もいらっしやうが、想像以上にオリンピックについて、特に開幕式(及

び閉幕式)がどのように演出されるかについては、一様に関心が高く、私の周りの学者たちにおいても様々な言及があつた。一つの典型は、オリンピック開幕式セレモニーを昨今の商業主義の反映として批判的に見る観点であつた。例えば、最終聖火ランナー李寧氏は元陸上の選手であるのだが、近年ではスポーツ用品の社長となつている有名人であり、彼を最終聖火ランナーに選んだことは、特権的な商機を与える行為であり許されないのではないか、という声も多く聞かれた。なるほど、その批判はもつともなことである。ただ商業化という傾向そのものについては、大なり小なりオリンピックの昨今の傾向を反映しているにすぎないものとも言え、取り立てて北京オリンピックだけに当てはまるものではないものとも言えよう。

年配の方々のある意見として、

学者であるなしの別に関係なく、長年の中国の国際環境における政治的経済的劣位を跳ね返す儀式として、あの盛大な開幕式セレモニーについて無碍には否定できない、という意見も多かった。それはそれとして一つの一般性のある、中国人の意識を代表する見解である。これはまた、開幕式セレモニーだけに限定されないもので、オリンピックが成功の内に開催し得たことが中国人の地位の向上を表現したものとす、一般的评价を反映していると言えよう。

ただし、このセレモニーの演出の中身そのものについては、なぜか議論が低調にならざるを得ないようである。それはセレモニーが、「朋あり、遠方より来たる、また楽しからずや」という古典成語を枕詞にしたことに象徴されるような、近年の国学ブームを反映していたこととも関係するよう思われる。この「伝統中国」的な

演出について、多くの学者から、実際の中国伝統とかけ離れた偽物だ、あるいは自己オリエンタリズムだ、という批判がなされた。こういういた批評は、学者の間ではまた一般的な見解であろうと思われる。また、このセレモニーに全くメッセージ性がなかったことは、大きな特徴として指摘し得るところである。そこで予測されるのは、開幕式セレモニーの演出が、近年ブームとなっている「国学」が全く非政治性のない「世故」あるいは「意匠」のようなものとして流通していることを反映したものだということである。

ただ私自身が開幕式セレモニーから垣間見えたものは、多くの演出にかかわる評価とはちよつとずれたところで発生した印象であった。あの国学的な演出は、現在の中国ナショナリズムを理解する上で、漢民族とその他の少数民族との関係を考える一つの材料となる

のではないか、という一つの見方である。日本のマスメディアにおいて、少数民族の衣裳を着た子供たちの登場について、「正確に少数民族を代表していなかった」という批評があり、それに対応して中国側のスポークスマンが、「一つ一つを代表したのではなく、少数民族すべてを代表したというだけだ」という反論があった。そのことについては、私自身は、さらに慎重に考えなければならぬ問題を感じた。何故ならば、北京オリンピックに対するチベット人の抗議行動、さらにウイグル人独立グループと見られる「破壊活動」も含めたところで意識された問題構造とつながっているからである。つまり中国の学者世界において、中国政府の教条的な「反テロ」言説とは別のところで物事を考えている人々にとって、それらの事件は、現在の中国の民族政策に対する注意を促すこととなっ

た。ただそれら複数の学者の問いは、単に少数民族政策の是非のレベルにとどまるものではなかった。それら様々な事件に対して、多くの学者は、やはり「漢民族」たるものとしてそれら事件の意味に直面せざるを得なかつたわけだが、またもとよりその「漢民族」とは一体何であるのか、という問題意識が現れたのである。

通常には、中華民族は複数のエスニシティーをまとめる概念として扱われ、漢民族はその中の一つの最大のエスニシティーの一つと見なされるかもしれない。しかし実際には漢民族とは、血統的、自然的共同体ではなく、文化的な記号のようなものとして考えられるべきものであろう。血族的な発想を使用したのは、おそらく辛亥革命前夜からの話であらう。つまり漢民族とは、ある場所（主に豊かな場所）にマジヨリティーとして存在するようになった人々のこと

で、その核となる契機はおそらく漢字と農耕を共有するくらいのものであろうと考えられよう。つまり元々の雑多な諸民族が自身のエスニシティーを失った後でそこに同化した文化共同体である、と取り敢えず定義できるわけである。

強いて言えば、その自他の区分は、自律して生存しているエスニックな少数民族ではない、「自分たち」としか言いようがないものである。

このように、北京オリンピックおよび、その前後の様々な少数民族にかかわる事件は、少なくとも学者の間で、めぐりめぐって「漢民族とは何か」という問いを顕在化させることとなった。このような、漢民族という概念の曖昧さに対する自覚を促したことの意義は見逃せないものであった。

その意味からも、あの開幕式セレモニーの空虚さは、単に商業主義の時代、脱政治の時代を反映し

ただけのものではなかった、とも思われる。つまり、「漢民族」という表象それ自体がもとよりかなり希薄なものである、ということがむしろ鮮明になったかの観がある。確かに漠然と感じられるように、文字文化以外についての漢民族固有の民族的個性——例えば音楽の個性、美術・意匠の個性など、漢民族の個性は非常に薄いものである。そういつたことから、あのセレモニーを論ずることが中国人の間で非常に低調とならざるを得なかつたことに関して、それが中国ナシヨナリズムの中に含まれているそのような「漢民族」の特色を反映していたものだった、という私なりの感想を持った次第である。もちろん、中国において漢民族が比較的良好な場所を占め続けていたこと、人口的に圧倒的であることなど、最大のヘゲモニーを有していることについて忘れてはならないわけだが。

次に論じるべきは、開幕式・閉幕式セレモニーを実際に演じた要員メンバーにかかわる批評であろう。周知のとおり、セレモニーの演出の最大の動員主体は、人民解放軍であった。テレビ番組でも、セレモニー準備にかかわる裏舞台が取材され、放送されていた。しかして、開幕式からそして閉幕式へ、最後に演出の主体が解放軍だったことが明かされるような場面が出てきた。つまり、最後に明らかに解放軍の兵士と思われる人間が空中を舞うシーンである。このことは、日本から来ていたある学者が特に指摘されていたことで、やはり軍事的なるものが表舞台に露出されることについて懸念される。私自身も、その日本から来た学者の方とほとんど同意見である。

一つ的前提として解放軍という概念自体が、かつて「国軍」という概念が反動国家の軍隊、あるい

は帝国主義国家の軍隊として解され、そうであつてはならないという願いが込められていた歴史を鑑みたとして、しかし他の国から見れば、やはり単に「軍」がオリソニックに関与したものと見なされるだろう。つまり世界でも特殊な概念として存在しつづける人民解放軍は、中国人にとって自明と感じられつつも、その自明の構造自体は、決して外部においては自明ではない。しかして現代中国において、軍事の問題が不透明さを増してきていることは指摘せざるを得ないところである。それは人民共和国が、六〇年代に核兵器を所有してしまったこと、さらに昨今においては、宇宙開発に熱を上げていることにかかわる合理的な説明の希薄なことについての不安である。核兵器開発については、差し当たり文脈においては、かつて主権の防衛という説明原理があたりえられていた。だが今日の宇宙開

発については、私が様々な軍事関係の書籍を読む限りにおいて、超大国との通常兵器による正規戦での劣勢という非対称性を深く自覚しているがための措置として、宇宙領域への進出（いわゆる宇宙からの監視、および「防衛的攻撃」）が目指されていることの反映と見受けられる。

私が見る限り、中国は二〇世紀的なモードにおける軍事戦略においては、一度として帝国主義の段階、あるいはそれに匹敵する能力を持ったことはなかった。そのような伝統は持たなかった。しかし今後、二二世紀に向けてどうなっていくのか。閉幕式の解放軍の空中ショーとは、その意味でも中国の今後のあり方について、不透明な印象を残したことはひとりの観察者として言い残して置くべきだ、と感じた次第である。

（明治大学准教授）